4 月 16 日のメッセージ

聖書：ルカによる福音書　24：　13 – 35

「心は燃えていた」

人は自分の見たいものを自分の見たいようにしか見ません。これはいつの時代にあっても変わらない人間の悲しい性と言えるでしょう。

預言者エリシャの時代、北イスラエル王国は隣国アラムとの戦争に明け暮れていました。折悪しく、大飢饉に襲われていたイスラエルに追い打ちをかけるように、アラム軍が首都サマリアを包囲します。物価は高騰し、通常はただ同然で取引されていた鳩の糞でさえ、銀 50 グラムと等価になったといいます(「サマリアは大飢饉に見舞われていたが、それに包囲が加わって、ろばの頭一つが銀八十シェケル、鳩の糞四分の一カブが五シェケルで売られるようになった。」列王記下 6:25)。そこに、エリシャを通して主の言葉が臨みます。「明日の今ごろ、上等の小麦粉一セア(7.7 リットル)が一シェケル(銀 5 グラム)で売られる」(「主はこう言われる。『明日の今ごろ、サマリアの城門で上等の小麦粉一セアが一シェケル……』」列王記下 7:1)と。

聞いた者は一笑に付します(「王の介添えをしていた侍従は神の人に答えた。『主が天に窓を造られたとしても、そんなことはなかろう。』」列王記下 7:2)。神の力よりも現実に囚われているからです。しかし、人間の思いとは関係なく神は手を伸ばされ、アラム軍は敗走し、主の言葉は実現されました(「……主の言葉どおり上等の小麦粉一セアが一シェケル、大麦二セアが一シェケルで売られるようになった。」列王記下 7:16)。

「神の言葉は確実」。この例を待つまでもなく、誰もが知っているはずのことです。しかし、とても残念なことですが、それでもまだ信じられないのが人間の現実です。

エマオに向かう二人の弟子もまた同じでした。せっかくマグダラのマリアが「わたしは主を見ました」(ヨハネによる福音書 20:18)と告げたにもかかわらず、全くその言葉を信じていません。イエスの十字架に衝撃を受けてはいるものの、それは自分たちの望みが叶わなかったという意味においてのみでした(「わたしたちは、あの方こそイスラエルを解放してくださると望みをかけていました。……」ルカによる福音書 4:21)。

神の物語ではなく、あくまでも自分の物語としか出来事を捕らえていません。「自分さえ良ければ」から何一つ変わっていません。

「ああ、物分かりが悪く、心が鈍く預言者たちの言ったことすべてを信じられない者たち、メシアはこういう苦しみを受けて、栄光に入るはずだったのではないか。」(ルカによる福音書 24:25-26)

イエスの言葉は、自分の見たいようにしか世界を見ようとしない者たち全てに対する嘆きと言えるでしょう。真に大切なことに目を向けず、「自分さえ良ければ」に留まる弟子たちを新しい地平へと導くために、イエスはまたここでも姿を現されたのです。後ろ向きで自分のことしか考えない弟子たちに命の道を示すために来られたのです(「あなたの慈しみに生きる者に墓穴を見させず／命の道を教えてください。」詩編 16:10-11)。

イエスの言葉を聞いた弟子たちは、イエスの姿が消えてから今回の出来事を振り返ります。

「私たちの心は燃えていたではないか」(ルカによる福音書 24:32)

これは、「焼けぼっくいに火が付いた」ではありません。彼らの心に眠っていたかすかな光が表出したのでもありません。新しく命の道を示された者が、新たに神を賛美する者へと作り変えられたということです(「ハレルヤ、／全能者であり、／わたしたちの神である主が王となられた。わたしたちは喜び、大いに喜び、／神の栄光をたたえよう。」ヨハネの黙示録 19:6-7)。自分の見たいようにではなく、神が示されるものをしっかりと目を開いて受け止める者へと変えられたことを示しています。

エルサレムへ戻った二人は、神の言葉に聞き、その命の炎を点し続けながら生きていきます。神の正しさを証しする者となりました(「二人も、道で起こったことや、パンを裂いてくださったときにイエスだと分かった次第を話した。」ルカによる福音書 24:35)。

私たちも二人に続く者となっていきたい。改めてそう願います。